

特別展覧会

# 生誕120年記念 「シャガール版画」



ISO9001



ISO14001

## ごあいさつ

東京聖徳学園は東京市大森区（現・大田区）に聖徳家政学院と新井宿幼稚園を開設してから、今年で74年目になります。開設以来一貫して創立者川並香順・孝子両先生のご意志を受け継ぎ、幼稚園から大学院に至るまで一貫した聖徳太子の教えにある「和の精神」を建学の理念として、発展してきました。

その建学の精神は実物教育を積極的に推し進めることになり、その一つとして著名な絵画資料を揃えてあります。これらの貴重な資料の中から、生誕120年に当たるマルク・シャガールの作品を特別に公開することに致しました。

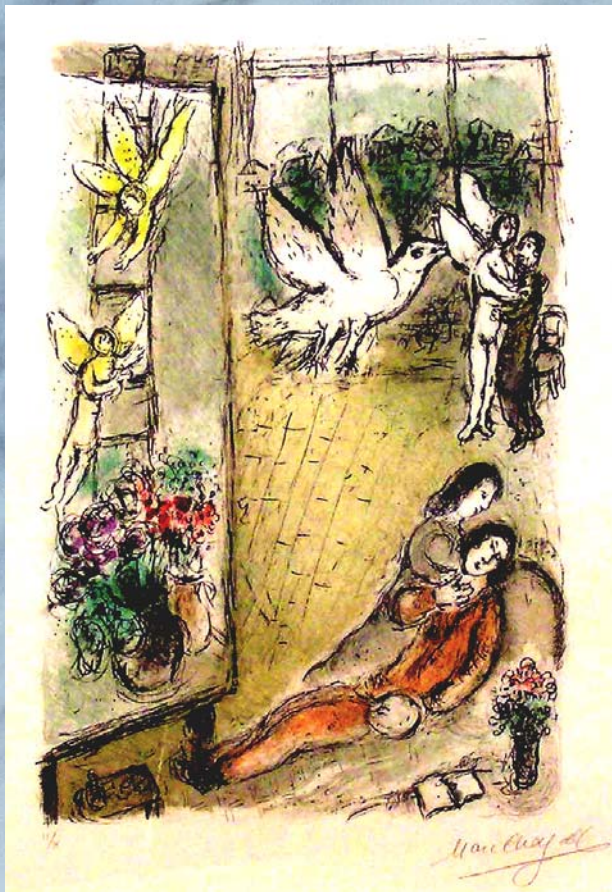
今回展示しましたシャガールの版画は、円熟期を迎える晩年の作品が主で、サーカスや結婚という、人が楽しんだり、喜んだりする様子を彼独特の手法で描いております。

この機会に本物の絵画の持つ迫力を感じとり、こころの中に美への感動が生まれることを願っています。

平成19年4月27日

学校法人東京聖徳学園理事長  
聖徳大学学長  
聖徳大学短期大学部学長  
学園長 川並弘昭

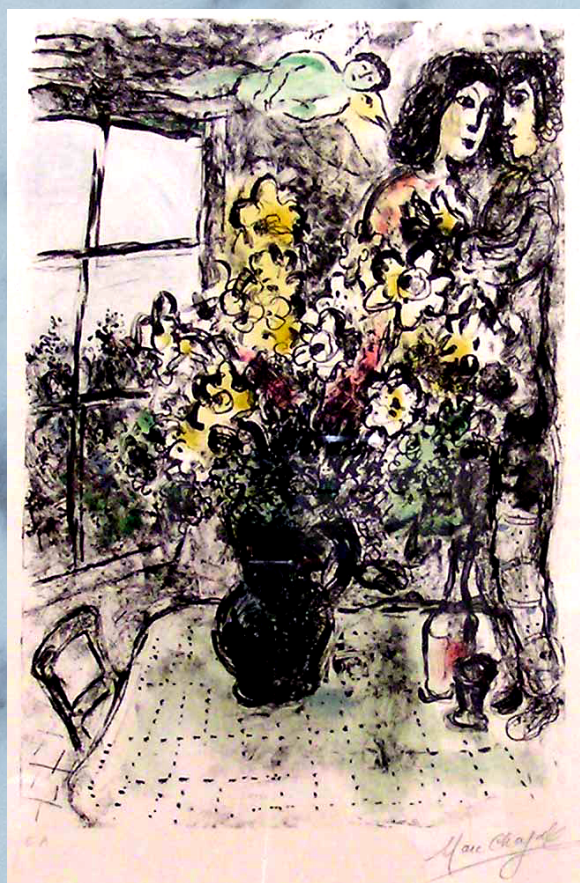
# 主な展示作品



「アトリエの鳥」 1976年 55×37cm



「夢」 1972年頃 62×49cm



「親密な関係」 1969年 60×39cm



「幻想の構図」 1976年 63.5×48cm

# 主な展示作品



「竖琴とダヴィデ王」 1979年 34.5×27cm



「画家と聖書のテーマ」 1974年 37.5×57cm



「黄色い山羊を連れた道化師」 1982年 67.5×52cm

## その他の展示作品

- 「黄色いピエロのサーカス」 1966年  
67×51.5cm
- 「小さな裸婦」 1971年  
47×35cm
- 「バッカス神の巫女」 1973年  
48×62cm
- 「夏の夢」 1983年  
38×53cm
- 「喚起」 1983年  
49.5×34cm
- 「結婚」 1983年  
34×25.5cm
- 「待ち合わせ」 1983年  
42.5×31.5cm
- 「緑の樹」 1984年  
61×48cm

## シャガールについて

ロシア出身のフランスの画家。1887 年、ユダヤ人の家庭に生まれ、少年時代をユダヤ人社会特有の宗教的環境のなかで過ごす。1907 年、当時の帝政ロシアの首都ペテルブルグの美術学校に入るが、同校のアカデミックな教育に満足しなかったシャガールは、やがてレオン・バクストの美術学校で学ぶことになる。1910 年パリに赴き、前衛詩人スーチン、モディリアーニらのフォービズム<sup>\*1</sup>、キュビズム<sup>\*2</sup>の芸術家達とも親交を結んだ。1914 年ベルリンの画廊で個展を催し、名声を確立した後、ロシアに帰国した。その後の第一次世界大戦の影響で、そのまま故郷にとどまる。1915 年にベラ・ローゼンフェルトと結婚し、ロシアで新居を構える。1922 年、ベルリンを経由し、1923 年にはふたたびパリに戻る。以後はパリを拠点として制作活動を続ける。1941 年、第二次大戦の勃発後、ナチスの迫害を避けて家族とともに、アメリカへ亡命する。この間に、音楽家ストラヴィンスキーの「火の鳥」の舞台装置や衣装を制作し、ニューヨーク近代美術館では、シャガールの大回顧展が開催される。1944 年、最愛の妻ベラはアメリカで病死する。1947 年にパリへ戻ったシャガールは、フランスに永住することを決意し、フランス国籍を取得する。フランスに戻ってからは、パリ、アムステルダム、ロンドンなどで、回顧展を開催し、リトグラフやステンドグラスなどにも優れた仕事を残す。エルサレムのハダッサ医療センター付属シナゴーク（ユダヤ教会堂）のステンドグラス、パリのオペラ座やニューヨークのメトロポリタン歌劇場、エルサレムのイスラエル国会議事堂の天井画などがよく知られている。1973 年、86 歳の誕生日には、南フランスのニース市が土地を提供し、「シャガール記念館」が開設され、聖書の物語を中心とした数多くの作品が展示されている。

1985 年、97 歳で生涯を終えるまで、キュビズムの出現、世界大戦、ロシア革命といった出来事と深く関わり、それらから多くを得ている。「屋根の上のバイオリン弾き」、「空を飛ぶ恋人たち」や鶏・牛といった、シャガールの作品の特徴を示すモチーフは、いずれもロシア帝政時代の思い出から生まれている。彼は、従来の絵画表現上の決まり事である遠近法、重力の法則、空間や時間の整合性などの制約を受けずに、奔放な想像力と華麗な色彩感覚で新たな幻想の世界を切り開いた。パリ在住の芸術家のなかで最も傑出した巨匠であり、またフランス風表現主義の最良の担い手であったといえよう。

\*1：野獣派とも呼ばれ、1905 年頃に若い芸術家達が原色を多用して描いた激しいタッチの絵について、当時の批評家が「あたかも野獣（フォーヴ）の檻の中にいるようだ」と表現したことが、このフォービズム（野獣派）のはじまりといわれる。

\*2：立体派とも呼ばれ、20 世紀の初頭にピカソ、ブラックらによって始められた新しい美術運動のこと。自然は単純な幾何形体に分解できるという、セザンヌが主張した理論に基づいている。現代の造形芸術に大きな影響を与えた。



会 期：平成 19 年 4 月 27 日（金）～平成 19 年 10 月 31 日（水）  
午前 9 時～午後 5 時（休館 毎日曜・祝日と学事日程による休業日）  
会 場：聖徳大学 8 号館 利根山光人記念ギャラリー  
会場への案内：J R・新京成線とも松戸駅下車、東口より徒歩 5 分

発行・お問い合わせ：聖徳大学川並記念図書館

T e l : 047-365-1111（大代）